

父孫一のこと

串田和美

父孫一がこの世を去ってから、そろそろ一四年の年月が過ぎる。

父は大正四年、一九一五年一月二日生まれで、父が二六歳の夏、長男の僕が生まれた。ちなみに母美枝子さんが二〇歳。終戦の三年前で、ふたりとも随分若い。あの頃はみんなそんなだったのだそうだが、わずかに残っている写真を見ると、ぎこちなく赤ん坊の僕を抱えている若い母を着物姿で腕組みして見つめている孫一さんは、今だったら三十中頃いやもつと年上のような風格にも見える。

終戦の半年ほど前、つまり孫一さんが二九歳、美枝子さんが二二歳、二歳の僕とまだ一歳になって間もない弟と、それからお婆ちゃん、五人家族は山形県の新庄のさらに奥の田舎に疎開をした。両親はふたりとも東京育ちだから戦時中の田舎で随分苦労しただろうと思うが、幼かった僕には辛いと実感した記憶はない。むしろ父と薪拾いをしたり、冬にはスキ―をつけた父の背中におぶさり雪の田圃を滑ったりした胸の奥が突き上げられるような甘酸っぱい記憶が、今でもたくさ

ん甦る。

孫一さんは東京に置いてきた大切なたくさんの蔵書や書き溜めた原稿や日記を、空襲で全て焼かれてしまった。

終戦後、一年ほどして東京に戻ったのだが、家のあった都心の近くに一軒家を借りて暮らすことになった。古い日本家屋の平屋だったが、玄関のわきに一部屋だけ洋間があつて、そこが孫一さんの書齋になった。孫一さんは僕やふたりの弟とよく遊んでくれたが、父が書齋に入ったら声をかけてはいけないことになっていた。僕たち子どもはよくわからないので、「お父さんは勉強中」と思っていた。孫一さんの書齋はたちまち難しそうな古い本でいっぱいになり、さらに昆虫の標本箱や三脚のついた天体望遠鏡や得体の知れない瓶や、顔が描いてある大きな木の実やとにかく訳のわからない怪しげなもので足の踏み場もない部屋になった。そしてある時本の重さで床が抜けた。その時初めて本というものは重いものなのだということを知った。

僕は孫一さんが出かけて家にいない時、こっそりその部屋に入るのが好きだった。別に何をするというのでもなく、ただいつも孫一さんが書き物をしている椅子に座って、辺りを眺めているだけで、自分が大人の仲間入りをしたような気持ちになった。

とはいえ、自分の父親がどうも普通の親たちとは少し違うようだということにも気づいてきた。その頃孫一さんはどこかの高等学校や美術学校に講義をしに通っていたのだが、ある時随分早く帰宅したので、美枝子さんが「あら、どうしたの？」と聞くと「あんまり天気がよくて気持ちがいいから、井の頭公園のベンチに坐ってお弁当を食べて帰ってきちゃった」と言うのでみんなで大笑をした。そして幼かった僕も理由なくとても嬉しい気持ちになった。

孫一さんが「アルビレオ」という小さな同人誌を詩人や文筆家の仲間たちとつくるようになり、自作の朗読をしたり幻灯会をしたり、山登りの仲間たちや、ブロックフルーテを吹く音楽の仲間たちやいろいろな人たちが我が家に集まり、僕も仲間に入れてもらって、その頃の楽しい思い出はつきない。

孫一さんの本を出す出版社の人たちは何度も我が家にやってきて、丹念に打ち合わせをするので、僕ら家族も名前を覚えて、一緒に食事をしたり遊んでもらったりしました。そう、ファックスもコピー機ももちろんメールなんかない時代だから、直接顔を突き合わせて話し合いながら本をつくる。孫一さんは自分の書いた原稿の内容はもちろんだが、本そのもの

の装丁や質感にも随分こだわっていたようだ。紙の質、厚み、活字の形、インクの感じ、表紙を開くときの具合。箱から本がすーっと取り出せるか、いろんなことを気にしていたような気がする。だからといって決して贅沢な本をつくりたいという訳ではなく、豪華限定版などという特別な装丁の本が出ると「何かちょっといやらしいねえ」と少し困った顔をしていた。

孫一さんの新しい本ができ上がると、まず出版社の方が何冊かを風呂敷に包んで我が家に持ってくる。そしてちよつとした儀式のような空気が流れ、風呂敷から取り出した新しい本が孫一さんに手渡される。嬉しそうにゆっくり孫一さんが本を開く。僕ら子どもはわけもわからず「わーい！」とか言って手を叩く。もう随分昔の話のだが、僕には本というものはそういうものだとしり込まれていたもので、今でも書店に並ぶなんとも軽しい本の群れを眺めると、ふいに妙な違和感が湧き上がることもある。

孫一さんは、ゆっくり深く考え、一字一句を万年筆で原稿用紙に丁寧に書いていた。その本の内容にこだわると同時に、本そのものの姿、外容の大切さをも考えていたのだらうと思ふ。

(くしだ・かずよし 演出家・俳優)